

さいたまけんこしがやしりつしろのうえしょうがっこう  
学校名 埼玉県越谷市立城ノ上小学校

校長名 若田 範之

所在地 〒343-0011 埼玉県越谷市増林6066-1

TEL 048-960-3000

FAX 048-960-3001

E-mail koshi030@edu.city.koshigaya.saitama.jp

URL http://school.city.koshigaya.saitama.jp/shironoue-e/

## 1. 研究主題

「生きる力を培う活力ある児童の育成」  
一豊かな心とたくましい体の  
育成を図る指導の工夫—

## 2. 研究の期間

平成21年度～平成23年度 3年間

## 3. 研究の目的

本校では、「21世紀をかしこく・やさしく・たくましく生きる子どもの育成」を学校教育の基本目標に掲げ、「よく考える子」「心豊かな子」「健康な子」を目指す児童像としている。そのために、子どもたちに自分の生活や体力の現状に目を向けさせ、規範意識や規律ある生活態度、人とのかかわりの大切さを理解させるとともに、個々の体力に応じた運動をすることをおして、生涯にわたって進んで健康や体力の維持・増進への習慣を身につけさせることが重要であると考えた。そこで、本研究では、「生きる力」を支える『豊かな心』と『たくましい体』の育成を児童の主体的な健康づくりと捉え、道徳と体育、「心の面」と「体の面」から活力あふれる自ら心身共に健康な生活をしていこうとする児童の育成を目指した。

## 4. 研究の方法・実践内容

### (1) 1年目（平成21年度）

研修組織として、研修全体会—研修推進委員会—各学年部会（低・中・高学年部）—各専門部会（体育部・道徳部・環境部）を設置し、3年間継続した。

新体力テストの結果は、平成20年度県平均値を83.3%上回っていた。課題を明確にし、体育朝会（フレッシュタイム）の内容を充実させ、運動感覚づくり、体力向上、仲間との交流を目指した。

### (2) 2年目（平成22年度）

新体力テストの結果は、平成21年度県平均値を96.9%上回っていた。大幅に向上したが、投力に課題が残ったことから、全児童一斉、28コートを使った「みんなで対決！ドッジボール」を実施した。ルールを工夫す

ることにより運動量が増え、投力、巧緻性の向上につながった。

### (3) 3年目（平成23年度）

新体力テストの結果は、平成22年度県平均値を100%上回っていたが、より一層の握力の向上をねらい、「みんなで対決！全校つなひき」を実施した。12本の綱を使った学年ごとのクラス対抗戦は、仲間意識も高め、効果的にねらいに迫ることができた。

### 《3年間をととしての研究と実践内容》

#### (1) 体育の目標・児童につけさせたい力

ア 自分の体に気づき、見つめる力を育てる  
自分の健康や体力に関心を持ち、よりよい生活をしようとする意識を持たせる

イ 一人一人の体力を育てる

自分の課題を明確にし、体力の向上を目指して運動に取り組ませる

ウ 運動好きな児童を育てる

友だちや環境とのかかわり合いの中で運動の楽しさを見だし生涯にわたって運動に親しもうとする態度を育てる

#### (2) 体育科授業の充実を図る3つのポイント

ア 豊富な運動量

基礎の運動・運動感覚を重視して

イ 教材分析

他学年との縦の系統の重視

ウ 温かなかかわり合い

教師の言葉かけ・子ども同士の学び合い

#### (3) 体育研究授業における取組の一例

ア ボール（操作）遊び・鉄棒遊び<2年生>

教具の工夫によって、楽しくボールを操作して遊び、投力の向上を目指す。風呂敷的、厚紙のグローブなど、手軽に生活化につなげた。



イ 体力を高める運動<5年生>

投力、握力を中心に、自分の課題を明確にさせた上で、適した負荷を選択し取り組んだ。自分の体力への関心を高め、効果的に体力の向上を図った。



### ウ 跳び箱運動<6年生>

I C T機器の活用を図り、自分の動きについて考え、高める一助とした。中学校との系統的なつながりを意識して指導し、確実な技能の習得を図った。



### (4) 運動の生活化

ア 体育朝会（フレッシュタイム）の内容を充実させ、運動感覚づくり、体力向上、仲間との交流を目指した。

イ 運動の生活化につながる教材・教具の開発  
「よし！やってみよう」と児童が思うような教材・教具を開発し授業に取り入れた。特に課題である投力の向上のために、休み時間でも手軽に行えるものを選び、環境を整えた。自然に児童が集まり、遊びながら夢中で取り組むことにより効果が上がった。  
<自作教材例>



ロープスロー 紙のグローブ 的あてくん

### (5) 家庭・地域との連携

「親子で体験！逆上がり」を土曜日に開催。我が子の体力に関心をもつ保護者が増えた。



### (6) 道徳教育の3つのアプローチ

ア 自分自身を深く見つめる力を育てる  
イ よりよく生きようとする力を育てる  
ウ 様々な人や物と豊かに関わる力を育てる

### (7) 道徳授業の資料分析の充実と学習形態の工夫

外部より指導者を招き、道徳教育推進教師を中心に資料分析を徹底的に深めた。導入、展開、終末に工夫を取り入れ、心に響く道徳授業を目指した。また、学習形態を工夫し、小集団の話し合いを取り入れた授業、道徳教育推進教師とのT Tによる授業、保護者やゲストティーチャーを招いての授業などを取り入れた。

21年度は「命の大切さ」22年度は「人とのかかわり」、23年度は「不撓不屈」を学校全体の重点とした。そして、各学年発達段階に応じて重点的な取組を決め、体育科授業との関連を考慮し実践した。これにより、「道徳の実践の場となる体育の授業」と「体育での体験を生かした道徳授業」が相互に響き合い一人一人の道徳性が高まった。心と体を一体としてとらえた指導を推進した。



## 5. 研究の成果

(1) 体力向上に向けた本研究により、児童の体力は高い水準を保っている。

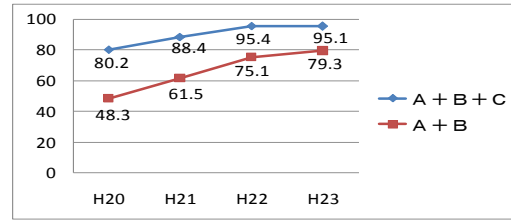


表 総合評価の割合(%)の推移

(2) 全教職員一体となった取組により、教材研究が深まり授業の質が高まった。学習効果が高まると同時に、教師の指導力向上にもつながった。

(3) 休み時間等に、積極的に運動に取り組む児童が増えた。運動の生活化が「体力」の向上につながっている。

(4) 教職員、保護者に「学校・家庭・地域が一体となった健康づくり」の意識が芽生えつつある。新体力テストの結果と食べ物の好き嫌いの有無に関して分析を行った結果、好き嫌いのない児童の方が総合評価がよい傾向にある。

(5) 道徳での教師の資料への思いが増し、資料分析に深まりが見られるようになった。また、学んだ道徳的価値を体育や生活の中で実践できるように場を設定し、事後指導に取り入れた結果、よりよく生きる道徳実践力が高まった。



## 6. 研究の意義・発展性

(1) これまでの授業研究で得た学習資料や開発教材・教具が、学校全体の共有財産として有効に活用される。毎年職員が入れ替わっても充実した体育授業が行えるシステムが構築される。

(2) 業前運動や体育朝会の工夫と充実により、運動の生活化、子どもたちの体力の向上（新体力テストの結果が毎年継続して県平均値を全項目上回る）が図られる。また、生涯スポーツへの基礎基本の定着が図られる。

(3) 「親子で体験逆上がり教室」等を継続的に開催していくことにより、運動技能が高まり、苦手な児童にできる喜びを味わわせ運動好きな児童が育成される。また、保護者の体力向上への関心も高まる。

(4) 本校の特色を生かした教育活動「心と体の表現活動」を継続・展開することで、「心と体を一体としてとらえ、仲間とともに学び合う体育」の定着が図られる。

